

# 沈黙・列挙・ためらい

—関連性からみた黙説法・列叙法・疑惑法—

岡田 聡 宏

## はじめに

Grice は、会話を一定の目的や方向を持った協調的作業であると考え、これを以下のような一般原理にまとめた。

(1) We might then formulate a rough general principle which participants will be expected (*ceteris paribus*) to observe, namely: Make your conversational contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged. One might label this the Cooperative Principle (CP).

Grice (1991: 307)

Grice は、さらにこの「協調の原理」を「量」「質」「関係」「様態」という 4 つの種類に分類できる公理 (*maxim*) に発展させている。本稿で考察する黙説(法)・列叙法・疑惑法(ためらい)と直接的に関係してくるのが「量の公理」であるため、この量の公理についてもう少し詳しくみてみることにする。

(2) 1. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).

2. Do not make your contribution more informative than is required.

Grice (1991: 308)

つまり、会話が成立するためには、情報量は多すぎても少なすぎてもいけないということである。ところが、黙説ないし沈黙は命題を持たず、表面上は情報を全く有さない発話である。列除法と疑惑法は、いわば余剰な情報を含む発話である。つまり、これらの表現形式は量の公理の違反例となってしまう、この説明を Grice の協調の原理に頼ることは、事実上不可能である。

黙説・列叙法・疑惑法（以下、より一般的な用語である「ためらい」を「疑惑法」の代りに用いる）はレトリック表現としての扱いも受けてはいるが、我々が日常使用する極一般的な表現形式である。したがってコミュニケーションに関する一般原理によって説明が可能でなくてはならない。逆に言えば、これら3つの表現形態もその他の表現と同様に扱える原理でなくては、一般原理とは呼べないのである。本稿では、黙説・列叙法・ためらいについて、関連性理論の観点から考察し、一見情報性が欠如している、あるいは過剰に含まれているように見える表現を「効果」と「労力」つまり「関連性」という概念から分析してみたい。それでは、まず関連性に関する中心概念について簡単に述べることにする。

## 1 関連性理論

話し手は関連性のある情報を聞き手に伝えようとし、聞き手の方も相手の発話から関連性のある情報が得られることを信じ、発話解釈を行おうとする。それでは、この関連性についてももう少し詳しくみてみることにする。関連性のある発話とは、相手の認知環境（ある個人が頭に浮かべることのできる想定 of 総和）を改善するような効果を持った発話を指す。認知環境を改善する効果には、新しい想定 of 獲得（文脈的含意）・想定 of 強化・想定 of 削除の3つが挙げられる。例えば、「今晚一杯いかがですか」という誘いに対して、「今日は、車なんですよ」と答える。「車を運転するならば、酒を飲んではいけない」という法的及び常識的なコンテクストを我々は持っており、このコンテクストと発話を前提として推論を行う。

(3) 前提 1: 車を運転するならば、酒を飲むことはできない（酒を飲んではいけない）

前提 2: 車を運転する（車できた）

結論: 酒を飲むことはできない

以上のように、文脈的含意として新しい想定を獲得する。次に強化と削除についてであるが、例えば、「大塚教授は、前期試験を行わない」という噂が広まったという状況を考えてもらいたい。ある時、履修者の1人である田端がこの噂を耳にする。「前期試験はないのかな」と弱い想定を持っているところに、同じ授業を履修する友人巣鴨から「前期試験はないみたいだ」と言われたとすると、もし田端が持つよりもわずかながら確かな想定を巣鴨が持っていたとすると、想定強化が行われる。しかし、この場合の強化の程度はわずかなものであろう。次に、直接大塚教授本人に会い、試験について確認したところ、「前期試験は行いません」という回答を得たとする。この場合、本人から確認を取ることによって、不確かな情報は、確実なものへと強化される。これに対して、大塚教授が「試験は行いますよ」と答えた場合は、田端の持っていた不確かな想定は削除され、新しい想定が取って代わることになる。

次に関連性を持たない発話の例を考えてみると、聞き手がすでに知っている情報や、参加する会話とは全く関係のない情報などは、認知環境の改善にはつながらないので、関連性を持たない（後者に関しては、持たない場合が多い）。しかし、会話の内容に関係のないことでも、火事や事件を知らせるような、より高い効果を持つ情報は、最優先されるし、わざと相手に関係のないことをいって話題を変えさせたりするような暗意 (implicature) を持つ場合も、上記の要件を満たすことになり、関連性の高い発話となる。質問の形式なので少々分かりづらくはあるが、次の例で大久保利通は、大隈重信に対し、話題とは無関係で、しかも双方にとって自明な事柄について聞いている。

(4) ふと大久保は話の腰をピシりと折って、「江藤というのは貴藩の出であったな」

と、わかりきったことをきいた……「あの江藤という性は、どのように書きます」と、大久保はぬけぬけと大隈にきいた。江藤は日本国の参議であり、司法卿を兼ねている。大久保がその姓の漢字を知らないはずはなかった。

(司馬遼太郎: 翔ぶが如く)

文が提示する命題は、話題とは無関係の内容で、しかも双方にとって自明の事柄である。詳しい分析は避けるが、1つには、大隈を信頼している大久保はそれ以上の説明は無用と判断し、話を中断させるため、もう1つには、小説中で大隈が解釈したように「江藤とはつきあうな」という暗意を伝えるため、自明の命題を提示したと考えられる。つまり、暗意を伝えることによって、関連性を持った発話となっている。

認知効果には上述の3種類があるが、この要件を満たせばどのような発話でも高い関連性を持つという訳ではない。あることを説明するのに、(度を越えて)全く要領を得ない話し方、前置きが長すぎてなかなか本題に入らない話し方などは、通常敬遠される。人は同じ情報が得られるならば、できる限り処理コストのかからない方法を選ぶ。つまり関連性とは、効果と労力という次の二段構えの概念によって規定される。

(5) (a) Other things being equal, the greater the cognitive effect achieved by the processing of a given piece of information, the greater its relevance for the individual who processes it.

(b) Other things being equal, the greater the effort involved in the processing of a given piece of information, the smaller its relevance for the individual who processes it.

Sperber & Wilson (1991: 544)

人はできるだけ高い効果を持つ情報を不必要な労力を払うことなしに手に入れようとするものなのである。つまり人間の認知は、傾向として関連性を最大にするように構成されているのである。Sperber & Wilsonはこの点について、

認知的原理として次のように定義している。

- (6) Human cognition tends to be geared to the maximisation of relevance.

ただし、現実の伝達の場合には、効果と労力の両面において、我々が行う発話は、必ずしも関連性が最大となっているものだけとは限らない。エチケットや社会的なルールなどの規制により、言いたいことが言えなかったり、婉曲表現を使ったりすることは珍しいことではない。また相手を傷つけないなどの様々な理由から、すべては語らず、表現を抑えることなどもある。つまり情報をどこまで伝えるかなどの選り好み（選択）の問題がある。さらに個人の能力の問題で、話下手で言いたいことがうまく伝えられないとか、相手の欲する情報を正確に読み取れないといったことが起る。コミュニケーションにおいては、情報が必ずしも最大の関連性を持っているとは言えないのである。そこで Sperber & Wilson は、最大のかわりに最適ということばを使い、我々が行う伝達という行為について、次のように伝達原理を定義している。

- (7) Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

Sperber & Wilson (1995: 260)

- (8) Presumption of optimal relevance

(a) The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.

(b) The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.

Sperber & Wilson (1995:270)

発話をするということは、それ自体が最適な関連性を持つことを当然視する

行為であり、それにより相手の側も最適な関連性を期待し、発話解釈のための努力を行うのである。

## 2 沈黙（黙説）

沈黙には2つの含意があると Leech (1983: 141) は述べている。つまり、相手に話しかけられない限り話してはならないという格言に象徴される丁寧の含意と、会話に参加した場合の沈黙は失礼にあたるという失礼の含意という相反する含意を沈黙は持つということである。ここで問題となるのが2人以上の者が行っている会話の中に別の人物が加わった場合であるという。

(9) The newcomer may feel it rude to interrupt the conversation, but the participants may feel it rude not to give the newcomer a chance to join in. The result may be an uncomfortable hiatus in the conversation.

Leech (1983: 141)

このように中断が生じた時には、沈黙を避けるため、些細な話題や、情報量の少ない話題を持ち出すことが多いようである。もちろん沈黙の意味にも、文化によって多少の差はでてくるだろう。例えば Chaika (1989) は、喋りまくるアメリカ人にうんざりしたデンマーク人夫婦の事例を挙げる一方で、度々家を訪れては、長時間ただ黙っているアイルランド人の客に関する例も挙げている。

Levinson (1983) は応答を好ましい (preferred) ものと好ましくない (dispreferred) ものに分け、依頼・申し出／誘いなどに対して生じる沈黙（遅れ）を、好ましくない応答である拒否が起こっていることの証拠としている。

(10) C: . . . I wondered if you could phone the vicar so that we could we could ((in-break)) do the final on Saturday (0.8) morning o:r (.) afternoon or

(3.0)

R: Yeah you see I'll phone him up and see if there's any time free

(2.0)

C: Yeah

R: Uh they're normally booked Saturdays but I don't- it might not be

Here over the course of C's first turn there are a number of slots provided where R could have performed the preferred compliance with C's request (these include the prolonged in-breath, the eight-tenths of a second pause, the lengthened *o:r* and its following short pause, and of course the long three-second silence after the turn). Given that preferred actins are properly done without delay, the fact that R's compliance is systematically delayed indicates that significant problems are coming up.

Levinson (1983: 337)

日本語においても、誘いを断る場合、あるいは断りたい場合、自然発生的な遅れや休止が使われることはよくあることである。また会議などの限られた場では、賛同を表すのに沈黙が用いられることもある。賛同や反対だけでなく、沈黙はコンテキストによって様々な意味を表す可能性を秘めている。自然発生的な沈黙は、意図的な沈黙ではない。もっと厳密な方をすれば伝達意図が双方に顕在的になっていない（伝達意図が隠されてしまっている）可能性もあり、純粋なコミュニケーションとは呼べないものもあるだろう。これに対し明らかに意図的・技法的に使用されるのが、小説中の会話における沈黙である。

沈黙を表すのに、小説では一般に「・・・・・・・・」とか「——」といった記号が使われる。井上ひさし(1984: 141-148)は、『文部省刊行物表記の基準』(昭和25年9月)から同省は区切り符号を 。、・ ( ) 「 」 (『 』) は「 」と同一種)の5種に限定していたことを記している。谷崎潤一郎(1975: 150-156)は、。、・ 「 」 (『 』) ? ! ———・・・・・の8種を挙げている。井上によると、外国語において使用されている区切り記

号の日本語への導入は、言文一致運動の一端として始まったということである。確かに明治期の作家達の文章中に、これらの記号はしばしば顔を出している。

沈黙に話を戻せば、小説中に沈黙を表す記号が用いられるのは、通常の会話の中に現れる自然発生的な沈黙を会話中に差し挟むことによって、作品中の会話をより現実的なものとするという目的もあるだろう。しかし、敢えてこのような沈黙記号を作品の中に用いるからには、この沈黙の中に、著者なりの何らかのメッセージが込められているはずである。現に西洋のレトリックの中には、黙説 (aposiopesis, silence) というものがある。黙説とは文の途中でやめてしまうこと (技法) を一般に指すが、ここでは中断法 (ものをいさして、あとになって言い継ぐこと) と沈黙を含め、広義に取りたい。‘ (I) Beg your pardon?, (It) Doesn't matter. , (I'll) See you later’ などの慣用的な頭部省略法のように、労力を節約するために用いられるものもあるかもしれないが、大抵の場合、複雑な意味を含んでおり、むしろ労力のかかるものであると言える。橋本 (1995: 44) は、「沈黙は無でなく、零記号としてその存在を誇示している」と述べ、(会話中に現れる沈黙についてであるが) 労力の面についても次のように主張している。

(11) 沈黙は表面的な生理身体的側面でいえばコストがゼロである。しかし、その意味を探るために様々な文脈を呼び出す作業、推意された諸前提の検討などを考えれば、聞き手の心理的な労力にはかなり大きいものがある。

橋本 (1995: 44)

ここで問題となるのが、冒頭でふれた Grice の量の公理である。Grice によれば、情報は、過剰であっても不足していてもいけない。ただし、量の公理の違反が生じる場合について、CP の枠組みにおいて説明が不可能な訳ではない。この説明は、Grice 自身によって行われている。A は B と休日をフランスで過ごす予定であり、できれば C に会いたいと A が考えているということは、双方了解しているといった状況で、(12) を発したとする。



(12) A: *Where does C live?*

B: *Somewhere in the South of France.*

Grice (1991: 311)

量の第1公理の違反が起こっている理由は、Bは、Cがどこに住んでいるかについては詳しく知らず、これ以上のことを言えば質の公理（真であるという証拠を持たないことを言うてはならない）に違反することになるからだとして述べている。つまり質の公理が量の公理よりも優先されたことになる。小説中に使われる沈黙に限定して話を進めると、登場人物が答えに窮しているというのであれば、つまりそれ以上与えるべき情報がなく、答えることができない場面を描写しているというのであれば、Griceの説明が成り立たなくもない。ところが、作者が何らかの含意を読者に伝える目的で、意図的に沈黙（記号）を使用するというのも一般に行われている。この場合、沈黙が雄弁にものを語る、つまり様々な含意を相手に伝えようとしている可能性がでてくるので、伝えるべき情報がないという状況には当てはまらない。こう考えると他の公理（特に質の公理）が優先されたという理由は、黙説には採用できなくなる。もう1つのGriceによる解決法は、一見量の公理に違反しているようにみえる発話でも、実は暗意 (implicature) のレベルでCPが遵守されるというものである。これならば、含意を伝えようとしている沈黙の例は説明可能であり、公理の違反に対する説明をうまく提示しているように思われるかもしれないが、そもそも関連性とは違ってCPの基礎となる公理は、いわば遵守されるべき規則であり、違反という例外が生じること自体が問題である。違反という例外を前提とした説明に頼らなくてはならないということは、原理自体に問題があると言わざるを得ない。

関連性理論では、処理労力が大きくなる場合、それを補って余りある高い効果を得るためであると考えている。したがって、黙説という大きな処理労力を要求する解釈には、高い効果が期待されるのである。それでは、芥川龍之介の「芋粥」の例をみてみよう。五位は「芋粥に飽かむ」ことを夢想していた、それ

を知った藤原利仁は軽蔑と憐憫を込めて、「お望みなら、利仁がお飽かせ申そう」と言う。この時五位は沈黙するが、さらに「おいやかな」と利仁に詰め寄られる。

(13) 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうちゃ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

当然ながら黙説は命題を持たない。したがって、明意も持たず、あるのは、暗意だけである。黙説解釈の責任の多くが読者に任されてしまっているので、処理労力もその分大きくなってしまふ。ただし、コンテクストを頼りに複数の弱い暗意を得ることができる。この作品においても、読者の理解を助けるために、五位の気持ちに関する記述はある。この記述の助けにより読者は、下手な答え方をしたらまた嘲弄されるのではないかとか、どう答えても、いずれにせよ馬鹿にされるのではないかといった五位の躊躇の気持ちについてはある程度のことは理解できる。しかしこの記述だけで五位の気持ちを表現し切れるのならば、そもそも黙説などといった手の込んだことはする必要がなくなってしまう。お願いしたい気持ちはやまやまではあるが、嘲弄されるのはたまらない、それに相手のことも信じがたい等々の五位の複雑な心境は、言葉をいくら重ねても言い尽くすことはできない。このような複雑な暗意を黙説は雄弁に語るることができる。労力がかかるが、それは正当なもので、高い効果を得るためのものなのである。したがって、読者の得る解釈は、関連性の原理に一致した解釈であると言える。

人間の強烈な感情を表現するのに誇張法が使われることがよくあるが、驚き・困惑・衝撃などが入り混じった複雑な瞬時の感情を表すのに、次の例では黙説が使われている。主人公上原の友人である多比良が自殺し、その息子が父親の趣味について言及する。(14)は、それに対する上原の反応である。

(14) 「あれでいっばし、芸術家気取りでしてね。自分の絵が駄目なことがよく

判ったから焼き捨てる、もう絵は描かない、なんて申しまして。いや、どうも」

「ほう」

「西洋の画家の絵を見て、判ったんだそうです。展覧会で。何しろ、専門家と張り合う気ではいるんですから」

「・・・・・・・・・・」

（丸谷才一「年の残り」）

西洋の画家の絵とは、上原が多比良に見せた絵のことであり、自殺の責任は自分にあるのではないとか、いや他にも原因となることは沢山あったのだから自分のせいではないとか、後になってから様々な解釈を上原は試みることになるのではあるが、多比良の息子の言葉を聞いた瞬間の驚き・困惑・衝撃などが入り混じった複雑な感情は、まさに黙説で表す以外になかったのであろう。他の表現では、消えてしまうような効果をこの沈黙表現は持っているのだ。

以上みてきた2つの例に共通することであるが、言葉では言い表せない複雑な感情を表すのに黙説が著者によって意図的に用いられている。これは、黙説の一般的な使用方法であるが、次の例では、より技巧的に黙説が用いられている。場所は浦柏という漁師町で、この町にとってはよそ者である蒸気河岸の先生（=私）が老人につかまり、「青べか」を売りつけられる場面である。

(15) 「おめえ舟買わねえか」と老人は私と並んで歩きながら喚いた、「タバコを忘れて着ちまっただが、おめえさん持ってねえだかい」

私はタバコを渡し、マッチを渡した。老人はタバコを一本抜いて口に咥え、風をよけながら巧みに火をつけると、タバコとマッチの箱をふところへしまった。

「いい舟があんだが」と老人は二百メートルも向こうにあるひねこびた松ノ木にでも話しかけるような、大きな声でどなりたてた、「いい舟で値段も安いもんだが、買わねえかね」

私が答えると、老人は初めからその答えを予期していたように、なんの

反応もあらわさず、吸っていたタバコを地面でもみ消し、残りを耳に挟んでから、手渡をかんだ。

(・・・)「おんだらにゃあよくわかんねだが、職はあるだかい」

私が答えると、老人はちょっと考えた。

「つまり失業者だな」と老人は喚いた、「嫁を貰う気はねえだかい」

私は黙っていた。

(山本周五郎『青べか物語』)

通常の黙説とは違い、最後の質問に対する答え以外は、「私」は沈黙している訳ではない。著者によって、発話が意図的に省略されてしまっているのだ。このような文章に出会って読者は、省略された明意を復元するための努力を行うであろう。例えば、「いい舟で値段も安いもんだが、買わねえかね」に対する、「私」の返答は、「いらぬよ」であろう。これはコンテキストから容易に推論することができる。最後の職に関する質問に対しては、「小説家だが、現在のところ童話や少女小説を書いてなんとか生活している」などの返答をしたであろうことは、労力がかかるがコンテキスト（後の章に職業に関する言及がある）から推論によって読み取ることができる。ただし、黙説の代りにこのような表現を使えば、その瞬間にこの文章は壊れてしまう。主人公の応答部分を省略することで、ぼろ舟を売りつけようとする老人に代表される、常識では測れない浦粕の町とその住人の強烈な印象を読者に焼き付けようとしているのである。「私」の言葉は、まさにこの老人と町に飲み込まれ、沈黙同然となってしまっているのである。最終章である三十年後においては、この主人公は積極的な役割を演じているため会話が略されずに記されているが、その他の章では、発話と呼べるようなものは、ほとんど記されていない。つまり、「私」は、この町では終始「部外者」なのである。この沈黙（省略）から、以上のような（もちろんこの町の強烈な印象や部外者としての主人公の立場以外にも、諧謔性など、様々な意味が込められているが）著者の意図を、読者は読み取ることができる。明意の復元は読者の責任として「私」の応答を省き、この省略によって生じた沈黙から、隠れた意味を解釈させようとしているのである。読者は、コンテク

ストを頼りに、明意の復元と沈黙に込められた（沈黙を通して伝達される）著者によるメッセージ、つまり暗意を読み取ることになる。もちろん労力がかかるが、沈黙以外の表現では伝えることのできない解釈、つまり高い効果が得られることになる。

黙説の中には、言わなくても分かることは言うに及ばずという労力を減じることによって関連性に貢献するものもあるかもしれないが、以上考察してきた黙説は、高い効果を得るために、大きな労力を要求するものであった。命題を提示する代りに沈黙を使用し、解釈の責任をほとんど読者に負わせているのである。これにより受動的立場にあった読者に、能動的な責任が与えられ、読者は、積極的に黙説の解釈に参加することになる。多大なる労力がかかるにもかかわらず、読者は高い効果が得られることを期待して発話（黙説）解釈を行おうとする。こうして得られた、高い効果を持つ解釈は、まさに関連性に一致した解釈であると言える。

### 3 ことばの列挙（列叙法）

伝統的レトリックには、列叙法という技法がある。この技法は、同種の語や概念を次々と積み上げて表現するものである。この列叙法を列挙法と漸層法とに分類する考え方もあるが、ここでは佐藤に倣って、列挙法と漸層法を包含した総称として、列叙法を広義に理解したい。

(16) ひとくちに列叙法と言っても、列叙のしかたにはいろいろの傾向がある。それをごくおおまかに、列挙法と漸層法のふたつの型に分けることができるだろう（五十嵐力の独特の用語法では、列叙法と漸層法はまったく種類のことなることばのあやとしてあつかわれていたが、私たちは列叙法を総称とし、そのなかに列挙法と漸層法というふたつの型がふくまれる、と考えておきたい）。

佐藤（1992a: 258-9）

程度の差こそあれ、列叙法には度を越えて、同格のことばを列挙して積み重

ねる場合が少なくない。こうなると、再び Grice の量の公理に対する違反が生じてしまう。黙説は量の第1公理に対する違反であったが、列叙法では、量の第2公理 ‘Do not make your contribution more informative than is required’ に対する違反となる。この違反に対する説明として、暗意のレベルでの CP の遵守ということも考えられるが、前節の場合と全く同じ理由で、妥当な説明として認めることはできない。それでは、具体例をみながら列叙法について考察してみよう。

(17) 女子、婦人、女人、内人、恭人、女性、女流、髪長などを皮切りに、鬼のようなるを鬼女、西洋婦人を洋婆、魚を売るを魚婆、しまりのないのを懶惰婦、美しきを好女、玉女、美姫、麗姝、清女、傾国、なまめかしいのを仇物、力強きを力婦、みにくいのを不別嬪、おしゃべりを弁女と、そのすべてを揚げるとこの頁を埋め尽くしかねないので、以下は割愛するが、数えてみたらなんと700以上もあったのだ。これは男のほぼ3倍である。

(井上ひさし『日本亭主図鑑』)

女性に関する表現の多様さを示すために、22の例が挙げられている。しかしながら、単に多様さを示すだけならば、最後の「なんと700以上もあったのだ。」だけでも十分だとも言える。GriceのCPに則って考えると、まさに量の公理に対する違反となる。つまり22の例のほとんどが、無駄であると考えられてしまう。関連性理論では、労力が大きい場合は、高い効果が期待できると考える。つまり、一見過剰なことばの羅列のように思われる(17)の列叙法には、高い効果が込められていると考えられるのである。女性に関する表現を22も列挙することによって、(17)の明意(explicature)に影響を与え、聞き手が考えるよりも多種多様な表現があることを伝えている。「700以上もあった」という記述では十分に表現し切れない程の多様性が、女性に関する表現にはあったということを伝えているのである。また、事実かどうかについては考えないことにして、文体の効果のみを客観的に分析すると、上記の明意に加え、「700という数字に反映されているように、数多くの違った顔を持つ」とか、「700の

顔を持つほどの図太さは男性にはない」といった弱い暗意も同時に得られる。(17)の列叙法は明意と暗意の双方に貢献することによって、高い効果を生み出しているのである。さらに弱い暗意について説明を続けると、この弱い暗意は、その後記される説明内容によって、強化されることになる。

(18) 700 対 230。この数字はじつはおそろしい意味を持っている。強弁すれば女は 700 の顔を持ち、男の 230 を圧倒している。別にいえば女は男の 3 倍も化けるのだ。

「叱れば脹れる、おだてればつけあがる、そこで殺せば化けて出る」という俗歌はまんざら嘘ではなかったのである。

これに対する読者の反応は、一様ではないことが予想される。つまり、これをもっともだと思ふ者にとっては、関連性の高い情報が伝えられることになるが、この考え方に異を唱え、頭から受けつけない者にとっては、認知環境の改変は行われず、関連性の高い情報であるとは言えない。しかしながら、著者が読者にとって関連性の高い情報を伝えようとしているのは事実であり、この事実自体に変わりはない。

(19) 要するに平安朝文明は貴族文明形式文明風流文明で、剛健確実の立派なものとは云はうよりは、繊細優麗のもので、漸々と次の時代、即ち武士の時代に政權を推移せしむる準備として、月卿雲客が美女才媛等と・・・迷信的空想的詩歌的音楽的美術的女性的夢幻的享樂的虚榮的に・・・恋物語や節会の噂で日を送ってゐるその一方には、粗い絹を纏ひ麤い詞を使ひ、面白くなく、鄙しく、行詰った、凄まじい、これを絵画にして象徴的に現せば餓鬼の草子の中の生物のような、或は・・・酒吞童子や鬼同丸のようなものもあつたであろう。

（幸田露伴『平将門』）

この例も明らかに量の公理に違反しており、CP では説明がつかない。過剰な列挙表現は、著者が意図的に構成したものであり、処理労力は必然的に高ま

るが、それを補って余りある高い効果を期待できるのである。つまり、公家の生活に関することばと庶民の生活に関することばを過剰に列挙することによって明意に影響を与え、読者が考えるよりも現実離れた貴族生活と、それとは対照的な、行き詰まった庶民の生活に関する情報を特定化(enrichment)してゆくのである。また「承平・天慶の乱は必然的結果である」等の暗意も伝えられる。これらの情報(効果)は、平安朝の混乱・武士の台頭(の前兆)・庶民の困窮等に関する読み手の想定を強化したり、あるいは否定したり、文脈含意を生じさせるなどして関連性に貢献すると言える。

(20) The illusion of harmony at the end of that Cold War was soon dissipated by the multiplication of ethnic conflicts and “ethnic cleansing,” the breakdown of law and order, the emergence of new patterns of alliance and conflict among states, the resurgence of neo-communist and neo-fascist movements, intensification of religious fundamentalism, the end of the “diplomacy of smiles” and “policy of yes” in Russia’s relations with the West, the inability of the United Nations and the United States to suppress bloody local conflicts, and the increasing assertiveness of rising China.

(S. Huntington, *The Clash of Civilizations*)

機能上の類似点が多いので詳しくは繰り返さないが、ここでも「調和という幻想」を消し去った要因を羅列している。これにより、いかに幻想を打ち壊した諸要因が多いかということを示すと同時に、‘the one harmonious world paradigm’ が間違っていることを読者達に徹底的に理解させようとしている。つまり間違った想定を持っている読者がいれば、その想定を削除を、弱い想定を持っている読者がいれば、その想定を強化を目指しているのである。

以上、列叙法について詳しく考察してきた。ある事象を的確に描写できる表現がみつければ、労力の面からもその表現を使うことが考えられる。しかし、そのような簡潔な物言いでできないような複雑な現実の状況がある場合、ことばを過剰に列挙することによって、受け手が考えるよりも程度の甚だしい状況



があることを伝える表現形式が使われることがある。これが列叙法である。この技法では、必然的に処理労力が増大してしまうが、その労力を上回る高い効果が期待できる。つまり、読み手の得た解釈は、関連性の原理に一致した解釈であると言える。

#### 4 ためらい（疑惑法）

最後に「ためらい」について簡単に触れることにする。伝統的レトリックにおいて、ためらいも、ことばのあやの1つとして扱われていた。これを表すのに、*aporia*, *addubitation* などの用語が使われてきた。「アポリア」の語源については、アリストテレスの『トピカ』における言及が参考になる。

(21) 同様に、困惑についても、相反する推理の対等が困惑をつくり出すことのできるものであると考えられるであろう。なぜなら、両方の側に立って、われわれが推理する場合、どちらの側に従っても、すべてのものは、同様に生ずると思われるとき、われわれは、どちらを行おうかと困惑するからである。

（『トピカ』（村治能就訳）第6巻・6・22）

アポリア（困惑）が、レトリック用語と哲学用語に分かれることになるが、佐藤（1992b: 63）の指摘にもあるように、「ふたつ以上の考えかたに優劣のつけがたいときの悩み、という本質的な点に着目してみるなら」、語源的なアポリアは、レトリック用語と哲学用語両方の「素質をそなえていた」ものと考えられる。

それでは、ためらい（疑惑法）の典型的な例ともいえる(22)をみてみよう。

(22) 今夜、死ぬのだ。それまでの数時間を、私は、幸福に使いたかった。こっとな、ごっとな、のろすぎる電車でゆられながら、暗鬱でもない、孤独の極でもない、智慧の果でもない、狂乱でもない、阿呆感でもない、号泣でもない、悶悶でもない、厳粛でもない、恐怖でもない、刑罰でもない、憤怒でもない、

諦観でもない、秋涼でもない、平和でもない、後悔でもない、沈思でもない、打算でもない、愛でもない、救ひでもない、言葉でもってそんなに派手に誇示できる感情の看板は、ひとつも持ち合わせてゐなかった。

(太宰治「狂言の神」)

主人公の思いつめた心理状態を描写するのに、「ためらい」が使われている。ことばの列挙という点からみれば、列叙法の一例だとも言える。もし量の公理に従って、経済性の面のみ焦点を合わせると、最後の部分「言葉でもってそんなに派手に誇示できる感情の看板は、ひとつも持ち合わせてゐなかった」だけでも、十分であると言える。しかし、効果の面を無視してはならない。自殺を考えるほどの主人公の心理状態を描写するのに、最後の部分だけでは全く用をなさない。このような簡潔な物言いでは、読者には不十分にしか伝わらないことが明らかなので、著者は、否定表現を重ねて、最後の発話に表されている想定を強め、いかなる表現でも描写し得ない心理状態であることを伝えている。このためらい表現によって、表意と、文脈含意が強化され、全体として発話の文脈効果が増大しているのである。

ためらいという修辞技法は存在するし、太宰の例も明らかに技法的なものであるが、ためらいという行為は非常に一般的なものであるとも言える。ある状況を説明するのに、ひとは、表現にためらう。適切なものがあれば、労力面から、その表現を選ぶであろうが、関連性の基本概念の節で触れたように、そのような表現がうまくみつかるとは限らない。ひとは、ためらい表現を重ねながら、少しでも正確に状況を伝えようとする。このような行為も極自然な行為であると思われる。次の例は、佐藤(1992b: 58)の「ためらい」についての記述であるが、説明内容ではなく、彼のためらい(より正確には訂正)表現をみてもらいたい。

(23) 自分のからだにもっとも似合う既製服をさがすように、心が、適切なことばをさがすのだ、と言ってもいい。が、事態はたぶん逆なのだろう。私は・・・既成の母言語の制度によって、かろうじて自分のひそやかな思ひにかたちを与

える……というほうが事実に近いのであろう。もう一度言いかえてみるなら、そうだ、きっと、私の思いは私の中の制度を——私のなかの他者を——たよりに成立するほかはないのだ。

ためらいの説明であるため、意図的に技法としてのためらい表現を重ねていると考えられるが、いずれにせよ様々に言いかえて表現している。もし、これも経済性だけに焦点を合わせてみれば、最後の「そうだ……」以下の表現だけでも十分であるとも言える。この点からみると、(23)は Grice の量の公理に対する違反になる。ただし、列叙法ほど明らかな違反にみえない原因は、この公理の「必要以上の情報性があるてはならない」という箇所にあると思われる。どの程度を以って必要とするか、全く明らかにされていない。(23)の例でも、見方によっては、必要とされる情報量であるとも言える。いずれにせよ、定義上の不備は否めない。関連性理論では、効果と労力という概念を明らかにし、妥当な労力であれば、つまり労力を上回る効果があれば、関連性を持つと考えている。したがって、レトリックを含め、あらゆる発話を統一の理論で説明することが可能となる。ひとは、同格の表現を重ねたり、ためらい表現を重ねたりしながら、ことばを通して、自分の思考を正確に相手に伝えようとする。つまり、労力を上回る効果を目指して、表現を工夫する、あるいは表現に思い悩む。そして、あとは相手に解釈を任せてしまう。こういった表現形態の1つが、「ためらい」なのである。ためらいという行為が自然なものであるため、表現としての「ためらい」が、技巧（意図）的なものか、自然発生的なものかの区別は容易ではない。*The Great Gatsby* においても、Nick は、あれこれと表現を加えたり、変えたりしながら、Gatsby について語り、最後に 'No — Gatsby tuned out all right at the end; it is what preyed on Gatsby, what foul dust floated in the wake of his dreams that temporarily closed out my interest in the abortive sorrows and shortwinded elations of men.' という結論に達する。(23)の例にも当てはまるが、最後の結論部分だけでは、自分の思考を性格に相手に伝えたことにはならない。ためらいの部分も含めた、すべての部分が、明意に影響を与え、高い関連性を生み出していると考えられる。

「ためらい」に関しては、以上であるが、ためらいと関係の深い「訂正」について、その極端な例を最後に考察してみたい。

(24) ママもそうだが、伯母さんはそれに輪をかけて買い物が好きである。お金もある。~~ママはいつか、伯母さんのようにお金に困らない未亡人ならなってみ~~たいといって、~~パパに叱られていた~~。先生も伯母さんも結婚したいと思ったが、伯母さんは絶世の美人だったからお金持ちへお嫁にいけないのだそうである。(中略)先生も伯母さんも結婚したいと思ったが、~~伯母さんのお父さんつまり夫伯母の父だから~~が先生の家の財産を調べて貧乏なので反対した。

(丸谷才一「年の残り」)

取り消し線の引かれた箇所は通常、無と同じであり、消去してもいいはずである。しかし、取り消し線と共に命題が提示されているということは、強制力は無いにしても、その命題をも相手に解釈させようとしている意図が感じられる。換言すれば、相手に伝えたいこと、つまり効果があると予想される。これは、高校生の子也の日記で、自分の伯母（正確には大伯母で、上原の見合い相手だった人物）と主人公の医者（上原）に対する言及がなされている。構造面で考えると、伝達者の子也としては、取り消した箇所なので、これを伝達する意図はなく、純粋な意味でのコミュニケーションは成立していない。しかし、小説には、伝達者としての作者が常に背後に控えている。つまり、これは、子也の日記を利用した、作者の伝達行為であることは明らかである。子也とかつての見合い相手に対する上原の主観的な思いが、作中の随所で語られているが、取り消し部分を読者に読ませることによって、今度は相手の側（子也とかつての見合い相手）の見解を示すことになる。つまり、上原の思考と相手の側の思考をこのような形で対照的に提示することによって、読者の解釈を客観化する。読者は上原のフィルターのかかった2人に対する見方と、(小説中の)現実とは、随分異なっていることが理解できる。発話解釈の責任の多くは読者に委ねられてしまっているので、労力はかかるが、その分の高い効果を含んだ解釈（ユーモアの効果も無視できないが）を得ることができるのである。

## 5 おわりに

黙説・列叙法・ためらいという3つの異なる修辞技法を考察してきたが、すべてに共通して言えることは、GriceのCPでは説明することができないということである。黙説は量の公理の第1原則に対する違反であり、列除法とためらいは第2原則に対する違反となる。暗意のレベルでCPが遵守されるという説明が、特に黙説の場合成り立つ可能性もあるが、CPは遵守されるべき規則であり、違反という例外が生じること自体が問題となってくる。つまり、例外を前提として2段構えの説明を必要とする理論は、その理論自体に問題があると言わざるを得ない。この点関連性理論ならば、効果と労力との関係から説明を行っているので、これら3つの技法を例外扱いする必要は無く、レトリックもその他の表現も特に区別することなく、統一的な一般的説明が可能となってくる。

黙説の場合は、表意を持たないが、無情報なのではなく、暗意の面で関連性に貢献するものと考えられる。列叙法では、過剰に同格表現が列挙されているために、その分の処理労力がかかるが、明意を通して、読者が考える以上の程度を持った状況があることを伝える。また、コンテキストにもよるので、個々の例を個別に検討する必要があるが、様々な暗意を生み出すことも考えられる。つまり明意と暗意によって生ずる効果によって、高い関連性を持つに至っているのである。「ためらい」では、技巧的なものと自然発生的なものとの区別ははっきりしないことが多いが、あれこれとことばに迷う表現法であり、その解釈はやはり読者に委ねられるために、いずれの場合でも、労力も増大する。伝達者が提示することによって相対化された、複数のためらい表現の中から、伝達者の思考を読み取ろうとする。「ためらい」もやはり、労力がかかるが、明意を中心とした効果の面から関連性の高い発話となっている。

本稿では、量の公理に違反する例として、3つの表現形態を取り上げ、関連性による統一的な説明を行った。この公理に違反すると考えられるものには、黙説・列叙法・ためらい以外にも、冗語法やトートロジー（同語反復法）など

が挙げられる。今後の課題として、関連性の原理の立場から、これらの技法について分析を行いたいと考えている。

## 参考文献

- Blakemore, D. 1992 *Understanding utterances*. Blackwell.  
Davis, S. 1991 *Pragmatics*. Oxford.  
Grice, H. P. 1991 'Logic and conversation', in Davis 1991: 305-315.  
Leech, G. 1983 *The principles of pragmatics*. Longman.  
Levinson, S. C. 1983 *Pragmatics*. Cambridge.  
Sperber, D. and D. Wilson 1991 'Loose Talk', in Davis 1991: 540-549.  
Sperber, D. and D. Wilson 1995 *Relevance: communication and cognition*. Second edition. Blackwell.  
Wilson, D. and D. Sperber. 1992. 'On verbal irony' *Lingua* 87, 53-76.

- 井上ひさし 1984『日本語文法』新潮文庫  
今井邦彦 2001『語用論への招待』大修館書店  
佐藤信夫 1992a『レトリック感覚』講談社学術文庫  
佐藤信夫 1992b『レトリック認識』講談社学術文庫  
谷崎潤一郎 1975『文章読本』中公文庫  
ドナルドソン、ローズ 1989『パロディのしくみ』島岡将訳 鳳書房  
橋本良明 1995「沈黙の意味」『月間言語』4月号 大修館書店  
ハッチオン 1997『パロディの理論』辻麻子訳 未来社

# *Silence, Accumulation, and Aporia:* A Relevance Perspective

Okada Toshihiro

In this paper I reject the idea that figures of speech such as *aposiopesis* or *silence*, *accumulation*, and *aporia* are departures from the norm or breaches of a rule or maxim of communication. I believe, on the contrary, that they are part of our ordinary and natural language use, which need no special treatment. It is assumed that the utterance interpretation including the comprehension of tropes depends upon the principle of relevance, and the hearer/reader's task is only to find an interpretation which is consistent with the principle of relevance, one which has enough cognitive effects to be worth the hearer/reader's attention without putting him to any gratuitous effort to obtain them. Figures of speech are not an exception. In most cases *silence* does not have an explicature and its interpretation mainly depends upon the recovery of implicatures. *Accumulation* is a figure to accumulate or repeat the similar expressions excessively, which causes an increase in processing efforts. These extra efforts, however, are outweighed by an increase in cognitive effects achieved through the recovery of the explicature, which may then encourage the reader to extend the context and thereby add implicatures. *Aporia* is interpreted in the same way. What is common to all these cases is that the interpretation process requires some effort, but this extra effort is outweighed by a gain in cognitive effects. Thus, the interpretation chosen by the reader is the one which is consistent with the principle of relevance.